南山短大における集団不適応
――学生相談室開設に向けての報告――

木　村　晴　子（南山短期大学助教授）

はじめに

人は１人では生きられない。社会の中で，他者とともにある存在である――という。しかし，対人関係の中にいることがその人を苦しめ，エネルギーを奪い，本来のその人の姿を歪めることもある。

職場に，学校に，友人やグループの中に，うまくとけ込むことができずに苦しむ，いわゆる“集団不適応”の人たちと会う心理療法の仕事の中で，“この人にとっての幸せは一体何なのか”と問い続けることを忘れることのない自分でありたいと考えている。

集団不適応とひとことで言っても，さまざまな考え方があり，概念があり，対象があって，簡単に述べることは困難である。したがって，本稿においては，この数年，何らかの問題を持って筆者のもとを訪れた南山短大の学生に接していて感じたこと，考えたことを中心に述べる。すなわち，南山短大生における学校での不適応現象に焦点をあて，どのような不適応のパターンがあるのか，英語科，人間関係科の両科に共通した，あるいは各科特有の適応困難があるとすればどのようなものであるのか，等を整理，考察する。

不適応の考え方

集団不適応をひとことでまとめることや定義づけることは困難であるが，一応本稿では，治療的接近が必要と思われる不適応を次のように考える。

現象――一般的にみて，その時点で本人が所属することが望ましい，あるいは所属しなければならないと思われる集団（学校，地域，職場など）に入れないでいる。

本人の状況――そのために本人が自分本来の力を発揮できず，生き生きした自分でない状況にいることがはっきりしており，何らかの援助を求めている。

登校拒否の状態に陥った子どもが「学校に問題があるから行けないのだ」と，しばしば言う。また，登校拒否児の心理治療を行う治療者たちに対して，“社会や学校が悪くてこうなっているのに，子どもの方を変えて適応させようとするのはおかしい”との批判を向ける人たちもある。もちろん，こうした批判にも耳を傾けるべきところがあり，学校，職場など，受け入れ側の集団はその体質やシステムの改善に常に積極的でなければならない。しかしながら，登校拒否の子どもをクラスに持ち，必死になって対応しておられる，ある先生の言葉を筆者は思い出す――「もちろん，学校にも問題がありますし，同級生の中にあの子をいじめる子もいます。けれども，それでも私は学校が良い所だと思っていますし，あの子にそれをわかってもらいたい。学校に来ることで自然に得られる多くのものがあることを考えると，なんとか来てほしいのです――」所属集団の持つ問題は種々あるが，やはり集団の中で生きることがその人の可能性を広げ，成長することに大きな貢献をする部分があることは確かである。学校はその意味で，一般に，所属することが望ましいと思われる集団であると言ってよい。また，成人の場合，生活を維持していくために，どうしても職場の集団の中で生きなければならないことになる。

しかしまた，ある集団に適応できていなくても，他の所で自分を発揮できる場がある時には，とりたてて治療的接近が必要であるとは言えない。例えば，学校には全く行かないでも，他の地域集団で生き生きと活躍する人であれば，それは単に制度上問題になるだけであって，本人に問題となるところはない。学校に行かぬことは本人の自由な選択であり，他の場所で本当にその人が“生きて”いるのであれば治療の対象になることはない。

以上のような意味で，先にあげる2つの要件を持つ人を治療の対象となりうる，適応困難の状態にある人，と規定したい。

不適応現象の効用

適応困難は本人にとってはもちろんのこと，家族にとっても，また受け入れ先の集団（学校，職場組織などの場合特に）にとっても，つらく困った事態である。しかしながら，不適応は必ずしもマイナスの側面ばかりでなく，その人にとって，あるいは家族をはじめ周囲の人たちにとってプラスの意味あいを含んでいる場合もあることを忘れてはならない。

＜　登校拒否に陥った小学生のAちゃんの家庭では，父親は子どものことは妻にまかせっきりで，仕事のみに熱中している人であった。Aちゃんの登校拒否をきっかけに，母親がAちゃんを連れて相談室へ通い，夫へ

の意志表示が出来るようになってゆくとともに，父親はAちゃんの遊びの相手をするようになった。ままごとやボール遊び，トランプなど，遊び方は子どもよりも下手であったが，家庭内でのコミュニケーションは徐々にスムーズになり，いつの間にかAちゃんの登校拒否は治っていた。＞

このように，子どもの不適応行動をきっかけに，コミュニケーションを回復して，家族全体が大きく変化し，成長していく例は数多い。

＜ 22歳のB子さんは裕福な家庭で何不自由なく育ち，反抗期もなく，全く手のかからない良い子として成人した。美人で男性にも好かれていたが，次第に，なにか周囲に対して自分がしっくりいかず，とり残されているように感じることが多くなった。そういう状態が続き，彼女は重いうつ状態に陥っていった。まわりのものすべてが自分から遠く，生き生きしてみえない症状が続くなかで，ある時彼女は自分の状態を次のように説明した。「なんだか，ガラスを1枚通してまわりを見ているようです。よく見えるのだけれど，なにか隔てられているのです」これを聞いたカウンセラーは"ガラスのケースに入った美しいフランス人形"を連想し，それは彼女そのものであると感じた。着飾って優雅にほほえんでいるけれども外界との交流がなく，ガラスで隔てられた世界に1人で住んでいる美しいお人形……B子さん自身も，これまでの"お人形"の自分が生き生きと生きるための歩みを始めなければならぬことに気づいたのである。そのプロセスは容易なものではないと思われたが，とにかく彼女は，周囲に適応できなくなった自分の症状から，自らの問題点と課題（それはこの家族全体のものとも関連したが）に気づくヒントを得たのである。＞

問題行動や症状――本稿では不適応現象――が，その人の持つ問題や置かれた状況に気づくためのきっかけを提供する場合も多い。その意味でも，不適応症状をネガティブな意味あいのものとしてばかりみるのでなく，その人の成長に向けてのヒントや課題という側面から光をあてていく姿勢を持って関っていくのが心理治療の仕事であるといってよい。

南山短大学生にみる不適応

これまで南山短大には"相談室"というシステムはなかったが，毎年4月，入学式の前後のガイダンスで，問題があれば相談に来るように，という意味の話をする。それを聞いて筆者の部屋に直接やってくる学生もあれば，保健室や学生課の窓口を通して，あるいは指導教員から紹介されて面接に来る学生もある。時期的には5～6月頃にやや多く，その時期には1年生の，いわゆる五月病，あるいは初めての試験を控えての不安の訴えが主なものである。

さらに，面白いことに，ここに述べたようなルートで筆者の部屋に相談に来るものの多くは英語科の学生である。その理由には大別して2つのことが考え

られる。まず，英語科生の場合，授業を通しての教師との密な個人的な交流が持ちにくく，問題を感じてもどこに持っていってよいかわからない。それで保健室に訴えたり筆者の所に直接やってきたりすることになる。指導生グループも人数が多く，限られた授業の中では目が届きにくい。そのためにいくつかの科目で欠席が重んできてはじめて気づくというケースがしばしばである。次に，筆者が人間関係科の教員であり，授業を通して英語科の学生と会うことがない，という立場にいることも大きなことであると思われる。学校内にカウンセリングルームがある場合，その学校の教員が相談係として待機していても生徒はなかなか相談に行きにくいものである。授業を受けている同じ先生をカウンセラーとして受け入れることは難しいからである。同じ意味で企業内での相談室にその会社での上司にあたる人が待機しているのも意味が少ないといわれる。その意味でカウンセラーは，授業や仕事とは無関係の第三者であることが望ましい。英語科生にとって筆者は毎日の授業の枠外にいる存在であるため，相談に行くのに適当な相手であるのであろう。

一方，人間関係科の学生にとって筆者はあくまでも授業を通じての教師である色彩が濃く，英語科生が来るような形では面接に来ることは少ない。個別に面接を求めて来るのは，自分自身の問題ではなく，家族や友人に問題がある場合が多い。

人間関係科では授業の中でしばしば個人面接が行われる。また，年に3～4回行われる合宿授業で1週間寝食をともにするなかで，教員は学生たちと比較的近い距離にいることが多い。そうした日常の教育活動を通して，不適応を感じている学生や，言動に心配なところがある学生をわりに早期に見つけることができ，ケースに応じて対策をたてることになる。

続いて，英語科生，人間関係科生の各々について，適応困難のパターンを次に述べる。

〈英語科生の場合〉

適応困難を訴えてくる英語科生のおおまかなパターンは次の3とおりに要約される。

Ⅰ型：能力（学力）に問題がある場合

南山短大は“レベルの高い”短大である。入学試験問題の難度は極めて高く，合格が難かしいといわれる。入学してからの授業のレベルもそれなりのものであるといってよい。特に英語科の場合，外国語の授業が多く，予習，復習，試験と，非常に多忙になる。そんな中で，「とても勉強が追いつかない」「難かしすぎてついていけない」と悲鳴をあげる学生も出てくる。そしてそのほとんどが口をそろえて「他の人がみなとても頭が良い人に思える」と言う。入学時の試験にはパスしてきているのであるから，能力的に全く無理であるはずはないのだが，一度このように感じ始めると劣等感がふくれあがり，エネルギーが

低下してうつ状態になり欠席がちになる。するとますますついていけなくなって，休学に持ち込んでいくケースが多い。このタイプの学生に共通しているのは，病的だと思われる所見はないが，人格的に非常に未熟であり，依存的で受動的な印象を受けることがある。家庭的にもさほど大きな問題はなく，娘のことを心配する，ものわかりの良い両親であることが多い。一方，学力のレベルが同程度であっても元気で登校している学生もある。彼らは好成績をあげるというわけにはいかなくとも，毎日楽しく学生生活を送っている。したがって，能力プラス性格面の未熟さ，弱さが特徴的なタイプがこの型である。

Ⅱ型：授業のやり方，内容の問題

英語科の場合，後述する人間関係科のケースほど，「私にはあわない」という訴えは多くない。この点で一群の英語科生が悩む点は，「もともと英語は好きではなかったのに……」ということである。短大のカリキュラムは盛りだくさんであり，英語科の授業は語学のものが大部分を占める。外国語が苦手な人にとっては多くの英語の授業は極めて苦痛なものに感じられることは想像に難くない。さらにネィティブ・スピーカーの教師による会話の授業もぎっしりであり，少人数制のクラスでのこうした授業は「英語アレルギー」の学生にはたいへん苦しいものとなる。これらの学生の多くは，国文，法科，経済などの学部，学科を目指したが合格できなかった者，あるいは特に英語を勉強しようと思っていなかったが，合格した中で南短のレベルが最も高く，周囲の勧めもあって入学してきたという者である。

もちろん，苦手なものを避けるのでなく，こうした学生も授業に積極的にかかわり，学んでいくうちに伸びていく者も多い。しかし，いやだいやだと思い続けて過す2年間はむなしいものである。単に学校の名前のみにこだわらぬ受験態度と，選択時の勇気と正しい判断が望まれる。

Ⅲ型：病的素因による不適応

この型の不適応は英語科，人間関係科にかかわらず，また他大学とも差があるものではない。本人の精神医学上の問題による発症のための不適応である。神経症あるいは精神病的な症状の出現はさまざまなことが引き金となって起こるが，19～20歳の年齢はこうした病的なものの発現をみる時期でもあり，教職員は学生の状況の変化に敏感でなければならない。発症をみる学生はまじめで成績も良い者が多く，その学生への対応は教員の苦慮するところとなる。英語科，人間関係科ともに本校の場合，授業への参加を重視するため，出欠規定が厳しく，しばらく休みが続くとその科目は失格になる。このような学生が出た時，学内でのサポートとともに，早期に治療のルートにのせること，家族とのコミュニケーションをはかること等がスムーズに行われることが望まれる。こうした事例の場合，家庭は外見的に恵まれていても，家族関係に問題があることが多く，本人への治療的接近とともに，家族に対するアプローチも必要になる。このような治療活動を実現していくために，学内での相談室の制度の定

着が待たれるところである。

〈人間関係科生の場合〉

人間関係科における不適応――を考える時，いつも思い出す１人の学生がある。１年生の中頃から授業を休みがちになり，“欠席の多い学生”としても名前があがりはじめた彼女は，呼び出しにもなかなか応じる様子がみられなかった。やっと筆者の部屋で話す時間が持てた時，彼女は人間関係科の“教員”である筆者を警戒しながらも，少しずつ自分の現在の状況と気持を話しはじめた。

――友達も，先生方のこともイヤなわけではない。レベルの高い南短に合格した時は親も大喜びで，自分もうれしかった。けれど，だんだんここでの生活や活動についていけなくなった。人間関係科の授業のやり方はあまりにも大学の勉強のイメージと違っていた。高校までの授業とも違う。そうしたやり方が悪いというのでは決してないけれど――と彼女は言う。

「こんなことを言うと，なにを子どもっぽいバカなことを，と思われるかもしれません。でも，例えばこういうことなのです。しばらく前のこと，私がとてもかわいがっていた猫が死にました。私にとっては大事件で，もう悲しくてたまらず，何も手につかない状態でした。けれど，そんな時にも授業ではグループを作って作業し，課題にとりくみ，発表し，積極的に動かなければなりません。それが私には耐えられないのです。普通の形の授業なら，そんな時はただ出席して，ノートをとっていさえすればいい。そういう受身的な態度がよくないということはわかります。けれど，参加しなければ始まらない，人関の授業には心の自由がない――このあと，ずっとこうした活動にはついていけないと思うのです。」

遠慮がちに，こういった意味のことを彼女は話してくれたのである。

このような学生を説得したり激励したりするための言葉は数多く考えられる。経験してみて，そこから自らについての気づきを得ることの意味，挑戦することが可能性の開発へつながること，ネガティブな状況にある時の自分を体験することの意味，そして参加する自由，しない自由，参加しないことを表明する自由……

しかし，猫の死の話をする彼女の姿はなぜか非常に素直に筆者の心に響いてきて，そうした教師臭い説得をする気持にはなれなかった。１つには18歳のナイーブで内向的な少女の心のゆれが直接に感じとれたからであり，知的な説得にはあまり意味がないと感じたからである。いま１つは，その当時の筆者自身，人間関係科に来たばかりの時であり，そのあまりに目まぐるしく動く“変った”授業の進め方に茫然としていた時期であって，学生に対して理屈ぬきで共感する部分があったからかもしれなかった。

人間関係科の場合，英語科不適応Ⅰ型にみられるような，能力面での問題は

あまり表面化することはない。授業においては語学授業に代表されるような形態や評価をするものは非常に少ない。したがって，テストによる結果が大きく成績を左右するという意味でのプレッシャーはさほど大きくはない。成績のつけ方もS（合格）F（不合格）I（不十分）のパターンであり，時には自己評価がとり入れられることもある。そんな中では英語科生のように「ついていけない」「まわりがみんな頭が良くみえる」といった訴えは聞くことはない。しかし，テストが少ないかわりに，かなりの量のレポートや読書が課されることが多く，科目によっては50枚，100枚以上というレポートが要求される。読解力，文章力に乏しい学生にとっては，これはかなりの苦痛である。しかし，この場合はそれでも友人や教員の援助を受けてそれなりの努力をし，それが認められることで乗り越えていくことができるようである。従って，能力上の問題で不適応をおこすという目立った事例はほとんど見られない。

人間関係科の場合，英語科におけるⅡ型のパターン，「授業のやり方や内容に関する問題」がクローズアップされてくる。

「人間関係科の授業は私にはあわない」とするタイプにはさらに2通りのパターンがある。

1つには人間関係科の学習形態や内容に反発し，「こんなことは大学の勉強じゃない」「一体何をやらせるのだ」「大学生になって，広い階段教室で，難しい講義を聞いてノートをとることにあこがれていたのに……」といった“反人関的”とでもいえるパターンである。体験学習の様々なグループ実習，特に工作的なものや，身体を動かす実習などに強く反発を示すことが多い。こうした学生は，有名国公立，4年制私立大学を志望したが失敗し，不本意にも短大に来ることになった者が大部分である。“反人関的”な学生たちは，時には少々デプレッシブになったり，イライラしたりしながら，短大での活動には熱中することなく，しらけた表情をみせて，それでも授業をさぼることはあまりせず，同じような仲間で寄り集まって2年間を過すのである。在学中に再受験をして，本来の志望校へチャレンジして去って行く者も時にはある。

いまひとつは，人間関係科での学習は良いことをしていると思うし，自分も積極的に動ければいいと思うのだが，性格的に自分にはできない，向いていない，と感じ，毎日を居づらく思っている「非人関的」な学生である。リーダーシップをとったり，人前で発表したり，思い切って自己表現をすることはもちろんのこと，小グループの中でも発言することがむずかしい，と感じる彼らにとっては，確かに，人間関係科の授業は非常にしんどく感じられるに違いない。自分を変えるために，「挑戦する」「とにかくやってみる」と言うのは簡単であるが，実際に動くのは難しい。特に，内向的な学生の場合，本来不得手な外界への動きかけやアピールを無理して行うと，外向的な人が同様のことをした場合とは比べものにはならぬようなエネルギーの消耗が起るものである。猫の死を話した学生の場合もこのタイプに入るだろう。彼女の「心の自由がない」と

いう訴えはこうした部分とも関連するものであったのだろう。

彼女と何回かの話あいを持った頃，ちょうど後期のＴグループ合宿が近づいていた。この合宿に出てみて自分を考え，人間関係科にいることを考えてみてから結論を出したいと彼女は言い，最も人間関係科的であるといわれているこの合宿に参加した。筆者は別のグループの担当であったが，５泊６日のＴグループの中で彼女は特に問題なく動き，メンバーとして参加していた，と報告された。しかし，最終日の閉会の折，トレーナーを囲んで手をとりあい，涙を流しあっている，彼女のグループを遠くから見て，その中に彼女の顔を見つけた時，筆者には彼女の気持が瞬間的に了解できたのである。彼女は輪の中にはいたけれども，一歩下った所にいて，白っぽい顔に，やわらかいけれども何か困ったような表情を浮べてほほえんでいた。合宿後，彼女は短大を去っていった。退学後，２度ばかり短かい便りが筆者のもとに届き，専門学校をめざして準備している旨の近況報告とともに，「意志の弱い学生のわがままを聞いてもらえてうれしかった」という意味のメッセージがそえられてあった。その後，目標どおりに進めたのかどうか，今彼女がどうしているのかはわからぬが，このケースは人間関係科に適応できなかった学生の１つの典型ではないかと思っている。

授業としての個人面接の折にこうした人関不適応現象を呈する学生の声を聞くことが多い。そして，１度話すとその後ちょいちょい話をしに来る学生も出てくる。反人関的な学生の方がそういうことが多く，話も深まるような印象である。そして，面白いことに，そのようにして２年間を過し，卒業していったにもかかわらず，卒業後はしばしば短大へ遊びにやって来る学生もこの中にいるのである。卒業して，距離を置いてみて，人間関係科の特異性を認めることができた，ということのようである。それに比し，非人関的な学生の方は自己嫌悪や罪悪感を感じていても，それを訴えたり表現したりすることが少ない。そのような学生の方に，よりきめ細かいケアが必要であり，彼らを見落すことのないようにしていかなければならないであろう。

人間関係科は高校を卒業して間もない学生たちをある種のカルチュア・ショックに巻き込む所であるといわれる。そのショックは相当に大きなものであるようである。そういう学生たちに対するケアをきめ細かく含むプログラムの充実をはかることが人間関係科の課題の１つとなろう。

また，反人関型，非人関型いずれのパターンにおいても共通していることは，「こういうことをしている所だとは知らなかった」と学生が口をそろえて言うことである。"南短" は短大としては偏差値もトップクラスの有名校である。「国立大学を落ちた時，私はがっかりしたけれど，南短に受かって両親は大喜びだった。それで浪人をやめて入学した。」「無理だと言われた人間関係科に思

いがけず合格した。他のことをやりたかったけれど，まわりが喜ぶし，受かったなかでは南短が最も難かしい所だったのでここにした。」――こういう話を一体，もう何度聞いたことだろう。最近は人間関係科の内容を知ったうえで入学してくる学生が増えてきてはいる。しかし，まだまだ人間関係科は理解されない場所であるといってよい。

このようなことは受験生の側の目的意識（自分が何をやりたいのか）と，それにあった大学，学部，学科捜しの問題であると同時に，人間関係科側の内容のアピールの問題である。その点もわれわれの忘れてはならなぬ側面である。

おわりに

南山短大は学生数も少なく，両科とも少人数単位でのきめ細かい指導が授業の中で行われることが特徴的である。それだけに，マンモス授業であれば流されていき，教員の目につかず埋没していくような不適応の学生が様々な形で浮きあがってくることになる。性格上の問題，受験体制からくる問題，家族関係，授業内容との関連で起きる問題など，その様相はさまざまである。本来，能力的にも優れており，豊かな感受性を備えた学生がその能力を発揮できぬ状態にある時，彼らに“生きて”もらうための援助活動が望まれ，それが相談室におけるカウンセラーの仕事である。

南山短大では今春より学生相談室をスタートさせる予定である。ここに述べたような学生が少しずつ自分を表現し，毎日をより自由に感じられるようになるための援助の場となることを願っている。